【585】

氏　　名　山（やま）　愛（めぐ）　美（み）
学位(専攻分野)　博　士　(教育学)
学位記番号　論教博第85号
学位授与の日付　平成11年7月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　連続連想と心理療法にみる言葉とイメージ

論文調査委員　(主査)教授 岡田康伸　教授 山中康裕　助教授 河合俊雄

論文内容の要旨

本論文は，言葉に関心をもった著者が，言葉に関してユングの言語連想検査をもとに，4つの調査をし，心理療法における「言葉とイメージ」を考察することでこころのレベルの言葉へと論をすすめたものである。

本論文は，II部構成であり，8章よりなる。第I部では，連想に関しての4つの調査結果が報告されている。また，II部では，心理療法における言葉とイメージに関して，4章より論じられる。

I部第1章は，「連想について」と題される。ここでは，連想に関しての歴史がレヴューされている。1879年にGaltonが連想の実験心理学的な研究を始めて，Wundt, Ebbinghausなどの言語学習の研究から，意志の研究，性格の研究へと展開していくことを述べる。そして，ユングはコンプレックスとの関係から言語連想検査（WAT）を考えた。ユングは，WATで，100語を刺激に，各々に連想を求めた。その反応語の内容でなく“障害”に注目した。以前なら，被験者の失敗とみなされていた中に情動的な要因，すなわちコンプレックスが働いていると考えた。

第2章は，「連続連想に見られる反応パターンの特徴」と題されている。著者はユングの考えに立ってWATを使用するが，著者のアイディアである連続連想の形をとる。この結果を少し詳しく述べる。40名の大学生を被験者として，WATを実施した。その中で，それぞれのコンプレックス言吾（C）10語と中性語（N）7語を一定の手順に従い選び出した。これらは，各被験者の次の調査の刺激語となる。この17語に，連続連想を実施した。180秒間に，10個の反応を求めた。その反応を10個の反応語を出さずに，途中で被験者から中止を願い出る反応拒否と180秒以内に10個の反応語を出せない反応欠如と感情及び評価に正の負荷（＋）か負の負荷（－）か負荷をもたないもの（0）などの面から分析した。結果は，たとえば，＋，－，の感情負荷は有意にC語にみられた。また，反応順序によって＋から－を下降，－から＋へを上昇と定義した時，C語に，N語よりも反応に多くの下降や上昇がみられた。など。

第3章は，「消化器系心身患者の」連続連想にみられる反応の特徴」と題される。まず，心身症の研究の歴史を述べる。C. Sifneos（1967年）によって見出された心身症の特徴であるalexithymia（失感情症）やStephanos（1969年）の心身症的現象などは，言語化の困難さ，空想の乏しさなどによると考える。そこで，心身症者の特徴を連続連想によってとらえようとする。統制群（C群）として男子20名，女子10名（計30名）と消化器系心身症者群（P群）男子23名，女子14名（計37名）を被験者とした。2章を参考に12個の刺激語（たとえば（1）山，（2）軽蔑する⑧誇りなど）を選び，連続連想を実施した。

結果は，例えば，P群がC群より2語以上による反応が多く出現した。また，P群はC群より，反応拒否が有意に多かったなどが明らかになった。これらにより心身症者が連続連想によってもMartyがいう機械的思考や適当な防衛ができにくいことなどが明らかになった。

第4章は，「連想における反応の特徴と外向－内向次元との関係について」と題される。ここで，連想と性格との関連を明らかにしようとした。被験者は男子大学生40名でWATを実施した。また，さらに，2章のように各被験者ごとに抽出された刺激語で連続連想を実施した。

E尺度（外向）の得点の高い人はWATにおいて，人や反対語が多い，反応時間の平均及びSDが小さいなど，いろいろな

結果をあきらかにした。また，連続連想において，C語に対して，十語や一語の反応語が多いこと，WATの反応時間のSDが大きいことなども明らかにした。

第2部第1章は，「心理療法における言葉について」と題される。いろいろな立場からの言葉の種類について概観し，それらの観点から，心理療法の言葉について考察した。たとえば，（4）「詩的言語」－心理療法における言葉と広告・宣伝の言葉との比較では，マス・メディアの言葉は人々の注意を引くために日常言語より深いレベルまで掘り下げていこうとする。そのため，「広告・宣伝の言葉と心理療法の言葉は，ともに「詩的言語」の特性を共有しつつ，意味を実体と切り離し表層に浮遊させるのか，深層まで意味を掘り下げるのかの違いであると論じる。」

2章は，「象徴のもつ多義性—象徴的観点から見た「緑」の意味について」と題される。童話やメルヘンや絵や神話や箱庭などで，「緑」が目につくこともあり，大切なものとの考えから，とりあえず，「緑」にしぼって，その象徴性について，論じた。

緑が異なる世界をつなぐものとしての緑，アンビバレントな存在としての緑，不安を喚起するものとしての緑，全体像の象徴としての緑などを明らかにした。

第3章は，「クライアントの語りかけてくるもの－言葉とイメージ」と題される。Cさん女性（詳しい情報はプライバシー保護のため，省略されていた）の事例を通して，Clが語る言葉には深層があり，そこには，豊かな言葉やイメージが重層構造をなしつつ存在していることを明らかにした。たとえば，「少し気にいっていた男の子が別の女の子と結婚し…」の夢には，表面に出ているのは，怒りだが，その背後には，クライアントの喪失感や悲しみさえあることが感じられるなどである。

また，箱庭では，その使用された玩具や水や井戸などに「つなぐもの」としての意味やエネルギー源などの象徴的解釈が可能なことを無理なく示していた。

第4章は「夢のイメージの流れに癒しを求めて」と題されている。ここでは，韓国籍の20代前半のDさんの夢シリーズを示して，そこに，Dさんが癒されていく過程を明らかにした。単に，在日韓国人の女性のアイデンティティの確立というだけでなく，体感レベルからの生きなおしが可能であったと論じた。

論文審査の結果の要旨

本論文は，言葉に関心をもち，言葉に関して，臨床心理学的接近法により，研究をすすめたものである。ユングの言語連想法と著者独自のアイディアによる連続連想法による調査とユング派的立場がらみた心理療法における言葉・イメージに関して，事例などを通して論じた。

本論文のオリジナリティとしては連続連想のよさを明確にしたことがまずあげられる。すなわち，連続連想は，反応語を出す際に，意図的な反応技術を用いにくいことや連想の反応に見られる評価及び感情の時間的推移についてみることができるなどを明らかにしたことである。

さらに，反応拒否や反応欠如がC語（コンプレックス語）にN語（中性語）よりも多くみられることやC語に感情負荷（＋も－も含んで）がN語より多くみられることなども明確にした。これらの結果は，ユングが「コンプレックス」について，否定的な意味合いのみを持つものではないということを強調していたことを裏づけた。すなわち，必ずしも「－語」の反応だけではなく，「＋」の反応もC語に多いことを示した。また，これは，一つの刺激語に対して，複数の反応語を求めることによって，C語は，何らかの色合いをもつ感情を呼び起こすものであることを明らかにしたといえる。また，消化器系心身症者の特徴を連続連想によって反応拒否や反応欠如や2語以上による反応や長い文による反応などによりとらえたことは，評価された。すなわち，P群は反応拒否や2声以上の反応は有意にC群より多いこと，また，反応欠如や長い文もC群より多い傾向にあることを明らかにした。2語以上や長い文章がP群に多いことは，一見，イメージを膨らませているようにみえる。しかし，実は，反応内容をよくみると，例えば，「子ども」に対して，「私には子どもは2人います」というように意識的レベルの客観的事実をくどくどと述べているのが多かったと緻密に分析していた。これらにより，さらに連続連想がユングの連想検査の結果よりも一歩踏み込んだ被験者の連想過程を明らかにした。すなわち，感情の負荷の動きに注目し，C語（コンプレックス語）に上昇や下降の揺れが多いことを明らかにした。

消化器系心身症者の失感情症（Sifneosの言葉，alexithymia）の特徴を跡付けた。そして感情がないというより感情語がないというべきであり，alexithymiaは失感情語症とすべきであるという山中の従来の主張を裏づけた。

内向・外向と言語連想との関連は，いくつかの事実を明らかにしているが，少し無理に他の性格テストとの関連をみている感じもあると指摘された。また，同じことは，２部第１章でいろいろな立場からの言葉の種類からみた心理療法の所でも感じられると指摘された。いろいろな立場が少し恣意的であり，もう少し一貫性がほしいという意見であった。しかし，心理療法の言葉について，いろいろ考察していることは評価され，さらに，いろいろな立場を充実していくことが期待された。

事例を通して言葉の重層性や象徴解釈などは，それ程，目新しいものではないという指摘もあった。しかし，このような夢や箱庭が事例を通して示せるのは，Cl. の能力の高さはもちろんだが，Th と Cl. との関係のよさをも示しており，著者の治療者としての成長を示すものであり，それなりに評価できると判断された。

ユングがみつけた言語連想を跡づけさらに連続連想によって，より緻密にその過程を明らかにしたことが高く評価された。その人その人の言葉の地図として，さらに，本研究を発展できるのではないかとも指摘され，そのアイディアの可能性が評価された。きびしい指摘もあっだが，教育学博士論文として評価された。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成11年4月6日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。